

令和6年能登半島地震への医療救護第5班活動

9階A病棟 貴志 まり

救護班第5班

活動期間:令和6年1月27日~31日

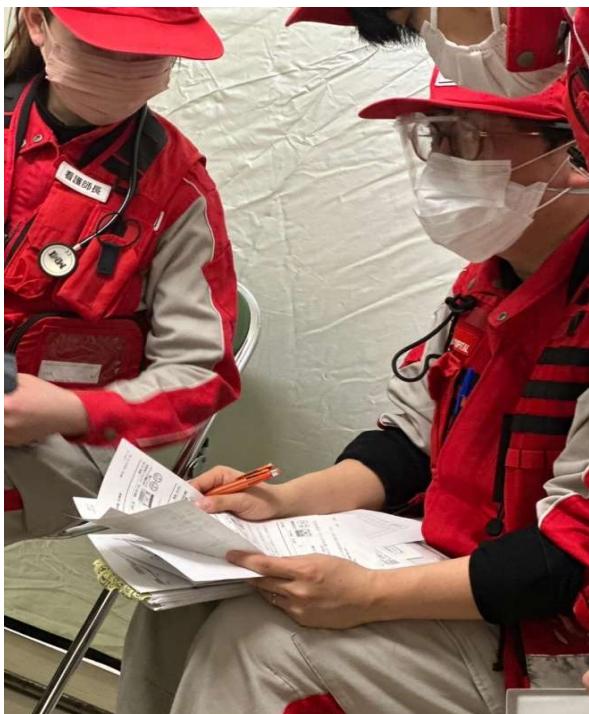
活動人員:医師1名、看護師3名、薬剤師1名、主事5名

【背景など】

2024年1月1日に16時10分、石川県能登地方を震源とした最大震度7の地震が発生しました。地震発生直後から当院では救護班を派遣しており、私たち第5班は石川県輪島市へ令和6年1月28日から30日まで派遣されました。

【活動内容】

第5班では巡回診療チームとこころのケアチームの二班に分かれて活動しました。巡回診療では、小学校、公民館などの避難所だけではなく、個人宅の巡回診療も行いました。地震発生からそろそろ一ヶ月が経過しようとしている頃で、医療のニーズは少なくなっていましたが、被災者の方々とお話しをすると、持病の悪化など隠れたニーズがたくさんあることを感じました。また、新型コロナ感染症や腸炎などの感染症対策も重要でしたが、設備の整った病院や自宅ではないため、理想だけを提示するのではなく、被災者の方々の視線に立ち、被災地で実践可能な感染症対策を提示することも大切だと痛感しました。こころのケアチームの活動では、市役所で働く支援者の方々を対象に、こころのケアの活動を行いました。市役所で働く方々も被災者でありながら、支援者であり、私たちが救護に行つた際には、まだ職場で寝泊りされている方々も大勢いらっしゃったため、かなりの疲労やストレスが蓄積されている状態であったと推測されます。しかしながら、同じ境遇の同僚に弱音や愚痴を話しにくいということもあり、自分の気持ちを吐き出せる場を作ることが、こころのケアの活動として大きな意味があると感じました。そして、今後も長期にわたり、活動を継続していく必要があると思います。



【今回派遣の総評】

今回の派遣を通じて、実際に被災地を目にして、美しい輪島の街が変わり果てた姿になっていることに大きなショック受けました。私たち救護員のメンバーの中に、金沢の大学出身者が3名いたこともあり、今回の救護に特別な思いを持ち、携わりました。5日間という短い時間で何ができるのだろうかとメンバー全員が自問自答し、メンバー10名で話しあいながら活動を行いました。地震発生から早3ヶ月が経とうとしており、徐々に災害関連の報道も少なくなってきたように感じます。輪島の復興にはまだまだ長い期間がかかると思いますので、地震を風化させてはならないと強く感じています。今後も、微力ではありますが、それぞれが出来る形で支援を続けていきたいと思っています。そして、いつの日か、復興した輪島の街に今回救護で派遣された10名で訪れたいです。被災地の皆様の、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

